

## SDGsの基礎知識(2)

一般財団法人日本生物科学研究所  
研究部 兼 検査部 堤 信幸

Vol.112で、SDGsとは何か、17のゴールにどのようなものがあるのか、その中で畜産に関係が深いゴールの中からゴール3について紹介しました。本号では残りの6, 12, 13, 14, 15について紹介します。

### ゴール6 「安全な水とトイレを世界中に」



この目標は、持続可能な飲料水や衛生状態を確保するだけでなく、安全な水源の保全をめざすものです。どうしてもトイレの話が大きくなりがちですが、畜産業界に関係する内容としては安全で持続可能な水源の保全が重要となります。

世界で使われている淡水の約70%が農業に利用されています。そして、その農業に使われている水の約30%が畜産に使われています。ここではウォーターフットプリントという考え方が大切になります。直訳すると「水の足跡」となるのですが、これは、商品や製品の生産から消費、廃棄の過程で消費される水の量を定量的に測定

する指標のことです。例えば、鶏肉1キロ、鶏卵1キロを生産する際に、鶏が飲んだ水の量だけでなく、餌のトウモロコシや大豆を育てるのに使われた水の量、食鳥処理場や鶏卵GPセンターで使われた様々な水の量、トラックや鶏舎を洗浄し、消毒するときに使われた水の量、し尿処理に使われた水の量などから総合的に算出します。

このウォーターフットプリントを意識することで、畜舎を作る際に経済性や生産性だけでなく、水源の位置や水の使用量も考える必要が出てくるでしょう。また、未処理のし尿が地下水や河川水を汚染しないような取り組みも重要です。

### ゴール12 「つくる責任 つかう責任」



この目標は、環境に害を及ぼす物質の管理に関する具体的な政策や国際協定などの措置を通じて、持続可能な消費と生産のパターンを推進することを目指しています。言い換えると、持続可能な生産消費形態を確保することになります。過放牧や、水資源、炭素循環など多岐に渡りますが、重要なポイントとして、畜産は環境にダメージを与える悪い面ばかりではなく、適切に管理されることで土壌侵食を防ぎ、生物多様性や水質の向上に貢献するものでもあるということです。また、消費者としては食品ロスを削減したり、食品リサイクルを促進したりするなど、簡単に取り組める内容もたくさんあります。

### ゴール13 「気候変動に具体的な対策を」



気候変動に緊急の対策が必要だと言われても、個人が取り組むにはイメージしにくいと思います。ただし、人が排出する温室効果ガスの5%が畜産由来であり、飼料生産、畜産、畜産加工、輸送などの畜産サプライチェーンまで含めると14.5%を占めていることは心のどこかに留めておきたいものです。

## ゴール14 「海の豊かさを守ろう」



この目標は、設定としては、海洋・沿岸生態系の保全と持続可能な利用を推進し、海洋汚染を予防するとともに、海洋資源の持続可能な利用によって小島嶼開発途上国(太平洋・西インド諸島・インド洋などにある、領土が狭く、低地の島国)とLDCs(後開発途上国)の経済的利益を増大させようとするものです。後半は畜産業界からは少し離れていてイメージしにくいですが、前半の海洋資源については深く関係しています。養豚や養鶏で消費している魚粉は世界の総生産量の27%を占めていて、海洋資源減少の原因の一つでもあります。農林水産省のサイトではゴール12の項目として紹介されていますが、多くの企業による代替飼料への取り組みは「海の豊かさを守る」ことにもつながります。

## ゴール15 「陸の豊かさを守ろう」



この目標は、持続可能な形で森林を管理し、劣化した土地を回復し、砂漠化対策を成功させ、自然の生息地の劣化を食い止め、生物多様性の損失に終止符を打つものです。ゴール12にあるように、家畜の飼育は環境への負の影響がある反面、持続可能な放牧地管理、野生生物の保護、土壌の肥沃化、栄養循環の向上など、環境に対して良い影響も与えます。国連食糧農業機関(FAO)の資料によると、地域によっては、家畜の飼育は希少な天然資源を有効活用するための最も効率的で実行可能な選択肢となりうる、と書かれています。重要なのは、短期的な利益を追求することではなく、飼料効率を向上させ、適切に管理された畜産を行うことが「陸の豊かさを守る」ことにつながるということです。

生物の多様性については、家畜の品種多様性の減少が含まれます。国連教育科学文化機関(UNESCO)の報告書では、家畜種の多様性がなくなることによって気候変動や害虫、病原体への抵抗性が低下する危険性が指摘されています。環境省によると、全世界には約175万種の生物があり、毎年4万種もの生き物が絶滅していることも知っておいて欲しいと思います。以上、2号にわたってSDGsについて紹介してきましたが、国連サミットで取り上げられたとしても、どうして突然様々な企業がSDGsに取り組み始めたのか不思議に思っていました。しかも、こんなにブームになって、エコバッグやマイボトルを持っている人が増えているのにも関わらず、日本のSDGs達成度ランキングは2020年17位、2021年18位、2022年19位と毎年順位が下がっています。これらの疑問について、非常に考えさせられる本がありますので最後に紹介したいと思います。

東京大学大学院 総合文化研究科准教授の齋藤幸平氏が2020年に出版した『人新世の「資本論」』(集英社新書)です。45万部を超えるベストセラーになりましたので、聞いたことのある人も多いと思います。この本は冒頭から「はじめに—SDGsは「大衆のアヘン」である!—」という過激な表現で始まりますが、内容は「SDGsを自己満足で終わらせてはいけない、本当の意味でのSDGsから目を逸らしてはいけない」ということが、とても丁寧に書かれています。おしゃれなエコバッグを毎年買い替えてしまったら、それは温暖化の対策になっているのでしょうか?レジ袋を削減することが、どれくらいSDGsに役立っているのでしょうか?どんなことでも良いので、疑問を持つことが最初の一步だと思います。少し厚い本ですが、SDGsへの理解を深めるにはとても役立つ1冊です。